

審査結果の要旨

氏名 中柴春乃

本研究は、教育開発援助において、グラスルーツの **NGO** の役割を、国際的な援助機関と受け入れ側の地域社会との間を媒介するインターフェースとして位置付け、その活動の内在的なダイナミズムを明らかにしたものである。

本論文は全部で6章からなっており、1～2章では、方法論が提示され、インド全体の教育の状況の概説に加えて、調査地であるミザプール地区の教育・児童労働の状況、調査対象 **NGO** である **CREDA** の概観が述べられている。3章では **CREDA** のグローバル社会との接点に着目し、インドにおける地域社会の発展という理念から出発した **CREDA** が国際援助機関と接触し、援助を得て教育開発プログラムを実施する過程で、国際機関が要求する文書作成の基準や業務上の期限遵守の原則、組織運営上の透明性、また人権等の概念や活動を設定する基盤となるイシューの設定、等々の点で国際援助の論理と実施のスタイル（「グローバル・フォーマット」）を組織として学習し、身に付けていった過程が明らかにされた。4章では **CREDA** のローカルな活動に目をむけ、ミザプール地区での活動についての詳細な分析から、広範に見られたカーペット産業での児童労働の実態に対して、その撲滅、教育機会の拡大に向けての実践活動が、やがて地域社会の中で教育に与えられる意味の構築とニードの形成（「ローカル・コンテンツ」）につながっていった経緯が跡付けられている。5章ではさらにこうしたグローバル・フォーマットとローカル・コンテンツの間の媒介としての **CREDA** の機能を支える論理的・組織的ダイナミクスを、一方でグローバルな国際機関との「ネゴシエーション」、他方で地域社会のニードについてのローカルな文脈での「解釈」、さらにその両者を可能とする組織的柔軟性、といった視点から整理・分析している。最終章では、全体のまとめとともに、**NGO** がグローバルとローカルの媒介であることによって、そのいずれとも質的に異なる、発展や教育についての独自の論理を構築する可能性が示唆されている。

本論文は、グローバルとローカルとの媒介としての **NGO** が地域社会の教育発展にもたすダイナミズムを、参与観察に基づくエスノグラフィーによって初めて明らかにしたものであり、その独創的な視点および叙述は高く評価される。また綿密な歴史的資料の読み込みによって、グラスルーツ **NGO** の、仲介者としての戦略的位置づけが段階的に展開していく過程を解明したことで、今後の教育開発研究へも幾多の示唆を与えるものである。未だグローバルとローカルの間位置するナショナルな諸機関との関連に関しては課題を残すものであるが、それは本研究の意義をそこなうものではない。以上の点から本論文は博士（教育学）の学位を授与するにふさわしいものと判断された。